

## **嫌われ生き物の展示とその意義**

**大淀川学習館  
主任主事 日高 謙次**

研究成果の概要：一般的に嫌われやすい生き物についての展示を通して、来館者の方に食物連鎖や生態系の学習内容を提供し、命の大切さを実感していただくことはできないかという思いから行った。

嫌われやすい生き物の展示方法について、視察研修やアンケートを実施し、調査分析することで、実施に向けた具体的指針を立てることができた。

### **1. 研究の背景**

食物連鎖や生態系を来館者に説明をする際、偏った見方をするのではなく、一生物として見ることが重要であると話してきた。これまで本館では嫌悪感をいだく人が多い生き物の話や飼育展示は避けてきた経緯があるが、食物連鎖や生態系の学習において人が嫌悪感をいだきやすい生き物を避けるのでは真の学習にはならないと判断し研究することにした。

### **2. 研究目的**

なぜ特定の生き物に対して嫌悪感をいだく人がいるのか。視察研修やアンケート調査を行うことを通して探り、結果を参考にして次年度の展示に生かす。

### **3. 研究の方法**

#### **(1) 類似施設への視察**

・平成26年11月27日

大阪府箕面公園昆虫館 視察

・平成26年11月28日

兵庫県伊丹市昆虫館 視察

#### **(2) 来館者・中学生・協会職員へのアンケート調査**

- ・性別、年齢、苦手としている生き物5種（5種以下ならよい）
- ・一番嫌いな生き物とその理由
- ・一番嫌いな生き物の生態等を答えてもらった。

### **4. 結果**

#### **(1) 類似施設への視察**

##### **①大阪府箕面公園昆虫館**

箕面公園昆虫館では何種かの嫌われやすい生体を飼育展示していた。例えばメンガタゴキブリの仲間（図1）を常設で飼育展示している。館ではゴキブリとして展示しているわけではなく、身近な昆虫であり頭部、胸部、腹部に分かれしており、観察が容易で成虫になると翅もあることから学習に有効であるとの判断で飼育展示している。

他にもオオゴキブリを触れることのできる展示もあった。（図2）オオゴキブリを展示している理由は身近な昆虫であり、ケースから逃げにくいためである。補充も簡単でエサ

も朽ち木で臭いも少ないため触れ合う生き物としては適しているとのことだった。



図1 メンガタゴキブリの仲間



図2 オオゴキブリコーナー（箕面）

## ②兵庫県伊丹市昆虫館

伊丹市昆虫館は、「ゴキブリ展」や「カムシ展」などの一般的には嫌われがちな生物の企画展を行ってきてている。常設でカムシの仲間やゴキブリの仲間を飼育展示もしている。

飼育展示ではマダガスカルオオゴキブリ（図3）を扱っていた。外国産だが飼育も容易で、見た目も大きいことから展示に適したゴキブリとのことであった。

触れ合えるコーナーでは箕面公園昆虫館と同じくオオゴキブリ（図4）を触らせていました。日本のゴキブリで翅はあるが飛翔できず、プラスチックの壁は上れないため逃げ出す心配

がなく、触れさせる昆虫としては適しているとのことだった。



図3 マダガスカルオオゴキブリ

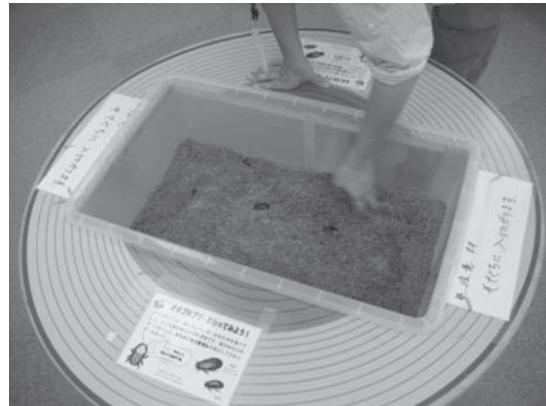


図4 オオゴキブリコーナー（伊丹）

## (2) 来館者、中学生、協会職員へのアンケート調査

はじめは来館者を対象と考えていたが、伊丹市昆虫館の観察時に「生き物を展示している施設に来る方は、ある程度生き物が好きな方で知識もある。幅広くアンケートを取りたいのであれば来館者以外からの回答もあるとおもしろくなるのではないか。」との助言をいただき来館者以外にもアンケートを実施することにした。

来館者と中学生、協会職員にご協力していただき計100人に対しアンケートを実施することにした。

男性41人、女性59人の計100人から

アンケートの回答が得られた。

## I 年代別についての結果の整理

年代別の結果を図5に示す。

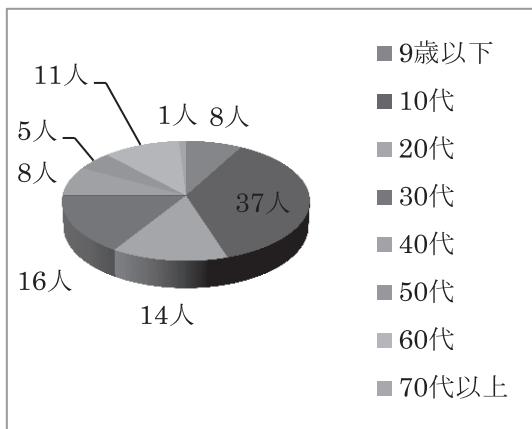


図5 年代別

## II 一番嫌いな生き物についての結果の整理

一番嫌いな生き物についての結果を図6に示す。

五種類の嫌いな生き物の中で一番をあげてもらった。多種多様な生き物の回答があったので大きな分類ごとに分けてみた。

### 哺乳類

- ・ネズミ（2）

### 鳥類

- ・鳥（1）

### 爬虫類

- ・トカゲ（1）
- ・ヘビ（11）
- ・ワニ（1）

### 両生類

- ・カエル（3）

### 魚類

- ・サメ（1）

### 節足動物

- ・ゲジ（1）
- ・クモ（16）
- ・ムカデ（11）

### 節足動物～昆虫

- ・昆虫全部（3）
- ・イモムシ（3）
- ・毛虫（3）
- ・ゴキブリ（27）
- ・バッタ（1）
- ・蚊（2）
- ・カマキリ（2）
- ・カメムシ（3）
- ・ハチ（2）

### 軟体動物

- ・ナメクジ（3）

その他

- ・嫌いな生き物はない（3）

※ () 内の単位は人

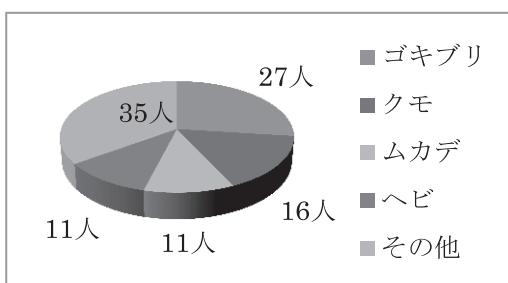


図6 1番嫌いな生き物

## III 生体別の嫌われる理由の整理

一番嫌いな生き物 21の回答の中で5人以上だった生き物はゴキブリ、クモ、ムカデ、ヘビとなった。

- ①ゴキブリ 男性10人 女性17人  
9歳以下（1） 10代（7） 20代（5）  
30代（9） 40代（5） 50代（0）  
60代（0） 70代以上（0）

### 嫌いな理由

- ・予測できない動きをするから（速い、飛ぶ）
- ・生理的に無理
- ・きたないから（不衛生な場所にいる）
- ・気持ち悪いから
- ・家の中にいるから

- ②クモ 男性3人 女性13人

- 9歳以下（1） 10代（7） 20代（4）  
30代（0） 40代（2） 50代（2）  
60代（0） 70代以上（0）

### 嫌いな理由

- ・親が嫌いだったから
- ・気持ち悪いから
- ・動きが気持ち悪いから
- ・脚がたくさんあるから
- ・糸を出すから
- ・色が変だから

③ムカデ 男性5人 女性6人  
 9歳以下(1) 10代(7) 20代(1)  
 30代(0) 40代(0) 50代(0)  
 60代(2) 70代以上(0)

嫌いな理由

- ・脚が多いから
- ・咬む(刺す)から
- ・気持ち悪いから
- ・動きが気持ち悪いから
- ・毒があるから

④ヘビ 男性5人 女性6人  
 9歳以下(0) 10代(0) 20代(0)  
 30代(3) 40代(0) 50代(2)  
 60代(5) 70代以上(1)

嫌いな理由

- ・攻撃的で毒があるから
- ・色や模様が気持ち悪いから
- ・対処の方法がわからないから

※ () 内の単位は人

## 5. 研究成果（考察）

### (1)類似施設の研修から

両館共にゴキブリを展示する理由は、身近な昆虫であり、体の仕組みを学習する効果が高いためである。飼育面も容易で、かつ累代飼育も可能であるため管理しやすい。決して嫌われているから、気持ち悪いからといった視点での展示ではないため、来館者の反応も悪くないようである。

このことから本館でもゴキブリを展示飼育する価値があると判断した。

### (2)アンケート結果から

クモを除く3種は男女差があまりないことか分かった。クモに男女差が出たのは不明である。

4種全てに世代間の差が出たことが見て取

れる。ゴキブリは50代以上は誰もおらず、逆にヘビは20代以下は一人もいない。

#### ①ゴキブリ

ゴキブリが嫌いな理由としては、ゴキブリ全種が嫌いというわけではなく、屋内で目撃することが多いクロゴキブリのみを指しているのではないかと推測できた。

#### ②クモ

クモが嫌いな理由としては、見た目が大きな要因であることが推測できた。

#### ③ムカデ

ムカデが嫌いな理由としては、毒と動きの不規則性が原因ではないかと推測できた。

#### ④ヘビ

ヘビが嫌いな理由としては、見た目もあるが、毒を持っている種類がいるためどう対処してよいかわからないことにより恐怖感が増大するためではないかと推測できた。

### (3)展示飼育の実践に向けて

ある特定の種を賛美または駆除を推奨するような展示は避けるべきである。あくまでも生態系、食物連鎖などの位置づけを学習できる展示とするよう気をつけて、実践に向けて動き出したい。

最後に、今後、各生体を展示する上での留意点をまとめておく。

#### ①ゴキブリ

元々日本に生息しているゴキブリの仲間は森林・草原などに生息し、屋内に侵入することは稀な生き物である。しかし、物流の発展とともに国外からの外来種が生息するようになり、それに伴い屋内への侵入が見られるようになった。屋内で見られるクロゴキブリ、チャバネゴキブリ、ワモンゴキブリなどは全て外来種である。

このように屋内で見られるゴキブリは衛

生・生態系の面でも駆除対象になるのはやむおえないことである。ただし元々日本に生息していたゴキブリは枯れ葉や朽ち木を分解する分解者であり、肉食の生き物の捕食対象になっている。このことを学習できる飼育展示を行えば充分に展示できる生き物である。

展示内容として、生体にオオゴキブリ（在来種）やサツマゴキブリ（在来種）、マダガスカルオオゴキブリ（国外種）を展示し体の仕組みや生態を解説することによりゴキブリを学習する。

#### ②クモ

近年クモは不快害虫と呼ばれ駆除の対象となっている。しかし一昔前の日本ではハエやカ、農作物を食べる昆虫などを捕食するため益虫として人間と深く関わってきた。子どもにとってはコガネグモの仲間を喧嘩させるために捕まえて遊びの一つとして関わってきた。

ところが近年は人間に対して有毒な外来種（セアカゴケグモ等）が侵入したため見慣れないクモ=有毒といった間違った認識が浸透しつつあると感じる。これもクモとの関わりが少なくなったためではないかと考えられる。元々日本に生息するクモで人間に有毒なクモは一種（カバキコマチグモ）のみ確認されているだけである。

このようにクモの生態を解説し、毒の有無や人間との関わりなどを飼育展示すればクモも違った目線で観察できる様になるのではないか。

展示内容として、生体にコガネグモの仲間（在来種）やジョロウグモ（在来種）、アシダカグモ（帰化種）を展示し体の仕組みや生態を解説する。あと人間に対して毒のある種類の写真や標本を展示することにより危険回避につなげクモを学習する。

#### ③ムカデ

日本に生息する大型のムカデは人間に対して有毒な毒があるため危険な生き物として広く認識されている。そのため飼育展示には危険も伴うため注意が必要である。当館に来館した園児が里山の楽校でムカデと知らずに捕まえた事例もある。

のことから生体の展示は危険性を加味して検討することになるが、ムカデの生態や危険性などの解説は必要である。

生体はトビズムカデ（在来種）を展示し体の仕組みや生態を解説する。ただしムカデは隠れるため展示には工夫が必要となる。そのほかにムカデと近い仲間であるゲジも展示すると面白いかもしれない。

#### ④ヘビ

近年、都市部でヘビを見る機会は滅多にならないことから一般的に馴染みの薄い生き物となってきた。しかしアオダイショウは穀物を食べるネズミを好んで捕食することから「家の守り神」として重宝され、白い体色（アルビノ）の個体は「神の使い」として珍重され日本人と深く関わってきた。マムシやヤマカガシ、宮崎県には生息していないがハブなどは毒を保有しているためヘビの種類がわからない人からはヘビ=毒があると思われている感じがする。宮崎県に生息するヘビで有毒なのはマムシとヤマカガシのみで、他の種は現在のところ無毒である。（ウミヘビは除く）タカチホヘビはミミズを、ヒバカリは小魚やオタマジャクシ、カエルなどを捕食する小型のヘビのため人間に対して危害がない種もある。

のことから宮崎県に生息するヘビを飼育展示することにより毒の有無や生態を学習し危険回避の効果にもつながるのではないかと

思う。

展示する生体はアオダイショウかシマヘビが良い。マムシ・ヤマカガシは有毒のため危険生物に指定され生きた生体の飼育には許可がいる。ヒバカリやシロマダラも展示したいが隠れるため展示には向かない生体である。ヘビは基本的に神経質で大きな音などに反応して餌を食べなくなることがある（拒食になりやすい）。当館の来館者には未就学児が多く利用するためヘビの展示近くでの表示にも工夫が必要である。

#### 6. 参考図書、論文等

伊丹市昆虫館レポート

「平成21（2009）年度企画展 ゴキブリ」2010

#### 【謝辞】

ご多忙の中、視察研修を快く承諾してくださいました伊丹市昆虫館様、箕面公園昆虫館様、アンケートに協力していただいた皆様に改めて御礼申し上げたい。